

拙者親方と申すは。御立合いの中に。御存知のお方もござりましようが。お江戸を立て二十里上方。相州小田原。一しき町をおすぎなされて。青物町を登りへお出でなさるれば。欄干橋虎屋藤右衛門只今は剃髪いたして。円齋となります。元町より大晦日まで。御手に入ます此薬は。昔ちんの国の唐人。ういらうという人。わが朝へ来り帝へ参内の折から。此薬を深くこめ置き。用ゆる時は一粒づつ。冠のすき間より取り出す。依て其名を帝より頂透香と給わる。即文字にはいただきすく香と書てとうちんこうと申す。只今は此薬殊の外世上に弘まり。ほうぼうに似看板を出し。イヤおだはらの灰俵のさん俵のすみ俵のと。いろいろに申せども。平がなをもつていろいろと致たは。親方えん齋ばかり。もしやお立合いの内に。熱海か塔の澤へ湯治にお出なさるか。又ハ伊勢御参宮の折からは必ず。門ちがいなされますな。御登ならば右の方。お下なれば左側。八方から八棟。おもてが三つ棟玉堂造り。はふには菊のとうのご紋を御赦免有て系図正しき薬でござる。イヤ最前より家名のじまんばかり申ても。御存じない方には。正身の胡椒の丸呑。白川夜船。さらば一粒たべかけて。其気味合をお目に懸ましよう。先此薬をかように一粒舌の上へのせまして。腹内へ納まするとイヤどうもいえぬハ。いしん肺肝がすこやかに成て。薫風咽より来り。口中びりようを生ずるがごとし。魚鳥木の子麵の喰合せ。其外萬病速功あること神のごとし。さて此薬第一の奇妙には舌のまわる事が銭ごまがはだして逃げる。ひよつと舌が廻り出すと。矢も楯もたまらぬじや。そりやそりやそりや廻つてくるわ。あわや咽。さたらな舌にかけさしおん。はまの二ツは唇の軽重かいごう爽に。あかさたなはまやらわ。をこそとのほもよろお。一ツへぎへぎにへぎほし。はじめ盆まめぼん米ぼんごぼう。摘だてつみ豆つみ山椒。書写算の社僧正。ここめのなま嚙小米のなまがみこん小米のこなまがみ。縹子ひじゆす。縹子しゆちん。親も嘉兵衛子も嘉兵衛。親かへい子かへい。子嘉兵衛親かへい。古栗の木ふる切口。雨がつばが番合羽。貴様のきやはんも皮脚絆。我等がきや半も皮脚絆。しつかわ袴のしつぽころびを。三針はりながにちよと縫て。ぬうてちよとぶんだせ。かわら撫子野石竹。のら如来のら如来。三のら如来にむのら如来。一寸のお小仏に。おけつまづきやるな。細溝にどちよによるり。京のなま鱈奈良なま学鯉。ちよと四五貫目。おちやたちよ茶たちよ。ちやつとたちや茶たちよ。青竹茶煎でお茶ちやつとたちや。くるわくるわ何が来る。高野の山のおこけら小僧。狸百足箸百ぜん天目百ばい。棒八百ぼん。武具馬ぐぶぐば

ぐ三ぶぐばぐ。合せて武具馬具六ぶぐばぐ。菊栗きくくりニきく栗合せてむきこみむむきこみ。あのなげしの長な
ぎなは誰なげしの長長刀ぞ、向うのごまからはえの胡麻からか真ごまがらか。あれこそほんのま胡麻殻。がら
ぴいがらぴい風車。おきやがれごぼし。おきやがれごぼし。ゆんべもごぼして又ごぼした。たあふぼぼたあふぼ
ぼちりからちりからつつたつぽ。たぼたぼ一丁だこ落たら煮てくを。にても焼ても喰れぬ物は五徳鉄きうかな熊
どうじに石熊石持虎熊虎きす。中にもどうじの羅生門には。茨木童子が。うで栗五合つかんでおむしやるかの頼光
のひざ元去ず。鮒きんかん椎茸定めてごたんなそば切そうめん。うどんかぐどんな。小子發知子棚のこ下の小桶に
こみそがこ有ぞ。こ杓子こもつて。こすくつてこよこせ。おつとがてんだ心得たんぼの川崎。かな川程がや。と
つかはしつて行ばやいとをすりむく。三里ばかりかふじ澤平塚大磯がしや小磯の宿を。七ツおきして早天そうそ
う相州小田原とうちん香隠れごぎらぬ。貴賤群集の花のお江戸の花いろいろ。あれあの花を見てお心をおやわら
ぎやつという。産子這子に至るまで此いろいろの御評番。御ぞんじないと申されまいつぶり角出せ棒出せ。
ぼうぼうまゆに。うすきねすりばち。ばちばちぐわらぐわらと。はめを他して今日御出の何も様に。上ねば成ぬ。
売ねばならぬと。息せいひつぱり東方世界の菓の元じめ菓師如来も上覽あれと。ホホ敬て。ういろいろはいらつ
しやりませぬか。